ふるさと安曇野
きのう きょう あした

No.19　2019.7.6

明科廃寺が造られた時代
――その時の明科、安曇野、そして信濃は――

はじめに

明科廃寺は、7世紀後半代の素弁八葉蓮華文瓦の出土から、信濃国でも最も古い寺院の一つとされています。昨年度、安曇野市教育委員会の発掘調査で多量の瓦が出土し、安曇野市ばかりでなく県内外から注目を集めました。そこで、関心が高まった明科廃寺が造られた時代の明科地域、さらに安曇野市域を、発掘資料からみていきます。

1　明科廃寺の姿をさぐる

（1）調査の歴史（図2）

1953年に住宅建設に伴う軒丸瓦や多量の布目瓦、翌年の調査による礫敷や瓦・瓦塔などの発見により、寺院跡と推定され「明科廃寺」と呼ばれることになりました。その際に地籍図や小字から寺域（図2色塗り部分）が推定されました（第1・2次調査）。最も大きな面積を調査対象とした第3次調査（1999年）では、多くの瓦のほか、建物跡がはじめて発見されました。第4次調査（2015年）では、寺院域の西を画すると考えられる柵列が発見され、昨年度の5次調査では多量の瓦が出土しました。

このように、注目を集めた明科廃寺も、実はそれほど広い面積を調査したわけではありません。

（2）出土した瓦（図3～5）

5次調査で、使われなくなった瓦が片付けられた状態で発

図1　明科地区の関連遺跡

図2　明科廃寺の調査地点

図３　第５次調査の瓦の出土状態

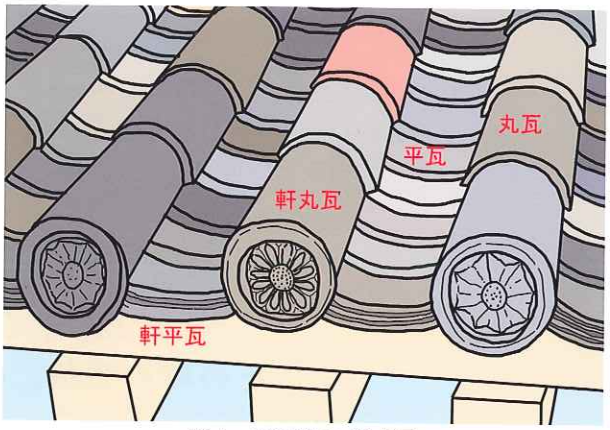


図４　瓦屋根の模式図

見されました。出土した多くの瓦は、屋根を組み合わせて葺くため、大きさや形が規格化されています。その製作法や文様のちがいは、痛んだ屋根の瓦を何回か補修して、寺院が維持されてきたことを物語っています。次に取り上げる４種類の瓦が多く、特殊な瓦として鴟尾や鬼瓦、隅平瓦などがあります。

平瓦　２，３枚重ねるため、枚数が最も多くなります。平面はやや台形で、断面はゆるやかに湾曲します。二つの製作方法があります。桶巻き作りは、細長い板をつないだ桶状の型に布をかぶせ、粘土板あるいは粘土紐を巻きつけ、外面を板で叩いて大きさや厚さをそろえます。次に型を外し筒状の粘土を四分割すると完成です。明科廃寺はほとんどが桶巻作りです。一枚作りは、８世紀代に国分寺造営とともに地方へ波及したといわれます。

丸瓦　重ね合わせるため、端に段を設ける玉縁式と、上部に向かって径を小さくする無段式の２種類があります。明科廃寺はほとんどが無段式です。円柱状の木型に布をかぶせ、板状の粘土を巻き付け、外側を板で叩いて木型と密着させ形を整えます。次に木型を外し、筒型になった粘土を縦に割ると二本の丸瓦ができます。紐状の粘土を木型に巻き付けた可能性があるものもあります。

軒丸瓦　型で押した文様は、仏教の象徴であるハスの花をモチーフとした一般的に蓮華文が用いられます。明科廃寺は、子葉が表現されない花弁（素弁）を用いた蓮華文です。花弁が８枚の第１型式と、12枚の第２型式に大きく分けられ、さらに花弁、中央の蓮子、周縁部の表現法から細分が可能です。製作方法は、第１型式が、丸瓦部と瓦当部を別々に作るのではなく、丸瓦の木型を用いて一体で作る成型台を用いた製作法と考えられます。第２型式は、型に粘土を押し込んで作った円板状の文様部に丸瓦を接合する嵌め込み式が多くみられます。

軒平瓦　平瓦の先端に粘土を足して厚くし文様がつけられます。明科廃寺は、平瓦を重ねたような重弧文で、ほとんどが三重です。わずかに二重があります。四重はありません。そのほか、１点ですが重弧文と唐草文が混ざった文様の重圏唐草文が１点あります。なお、文様部と

図５　明科廃寺の瓦

平瓦の境に顎（段）をつける段顎と無顎がありますが、明科廃寺は無顎がほとんどです。

鴟尾　寺院や宮殿の屋根の両端を飾るもので，形から沓形ともいわれます。これが変化して鯱になったといわれます。明科廃寺の出土品は、復元すると高さ１ｍ程になる大きなものです。飾られた建物の大きさを示しています。

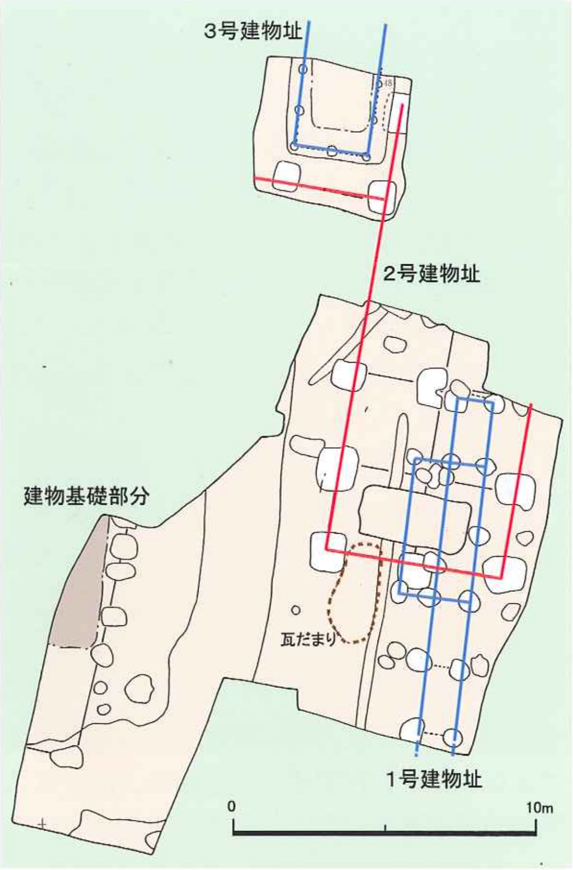


図６　明科廃寺の第３次調査地点の建物

（３）寺院跡の建物は（図６）

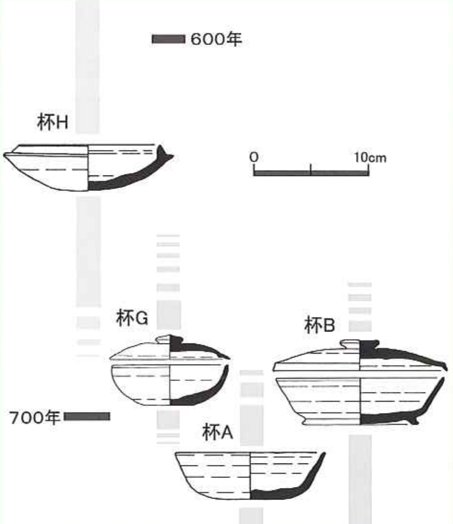
瓦を葺いた建物　多量の瓦は、主要な建物が本格的な瓦葺きであったことを示しています。従来の穴を掘って柱を立てる茅葺きか板葺きの建物（掘立柱建物）は、屋根に重い瓦を多量にのせると柱が沈み建物が倒壊してしまいます。瓦を葺いた建物は、地面に石を置き柱を据える礎石建物が新しく採用されます。ただ、石に据えた柱は、地震や台風など横からの力が加わると、倒れてしまいます。そこで瓦の重さが横揺れを防ぐことになります。しかし、一枚４kgの平瓦を1000枚葺いたとすると、重量は４トンにもなります。礎石を置く部分が沈まないように土や石を突き固め強く安定した地盤を造らなければなりません。さらに、瓦屋根の重量を分散させるために、複雑な組み物が必要となります。これらの技術は、都から技術者がやってこなければ到底実現できません。

明科廃寺では、礎石建物跡は発見されていません。寺院がなくなり、耕地や宅地とする時、邪魔になった基壇や礎石が撤去されてしまったかもしれません。ただ３次調査で発見された、礫を混ぜ粘土を敷きつめた「建物基礎部分」は、礎石建物の立つ基壇の痕跡かもしれません。

掘立柱建物・柵列　第３次調査で４棟の掘立柱建物跡が発見されました。発見された面が違ったり、建物が重なることから、一度に建っていません。200年ほどの間に、柱を土中に埋める掘立柱建物は、建て替えが必要だったのでしょう。これらは、寺院の主要部ではなく、僧侶の住まいなどの附属する建物の可能

コラム①　明科廃寺の創建の実年代は

７・８世紀紀代に、食器は土師器から須恵器に交代します。須恵器は、古墳時代以来の丸底の蓋杯（杯Ｈ）が徐々に量を減らし、交代するように内側にかえりをもつ蓋とセットの平底の小さな杯（杯Ｇ）が登場します。ほぼ同じ頃に、端部を折り曲げた蓋とセットになる高台が付く杯（杯Ｂ）が加わり、数を増やします。その後、蓋のつかない平底の杯（杯Ａ）が加わり、杯Ｇもなくなります。明科廃寺の瓦を焼いた桜坂窯跡は、杯Ｇの蓋を多量に焼いています。杯Ｇの蓋が生産され、使われた時代が、「明科廃寺が造られた時代」、ここでは、その実年代を７世紀後半の新しい段階としておきましょう。



７・８世紀の須恵器の食器
（実測図は栄町遺跡出土資料）

性があります。

（4）瓦　塔（図7）

瓦塔は、木造を模して焼き物で製作し仏塔に代って信仰対象としたといわれています。1・3次調査で発見された瓦塔の屋根部は、平面が八角形で径が1ｍほどになる建物で、三重、五重塔になると高さは二ｍをこえます。法隆寺夢殿のような平屋になるかもしれません。瓦塔の破片はこのほかにも数多く発見されています。いくつかの瓦塔が、寺院内に安置されていた可能性があります。

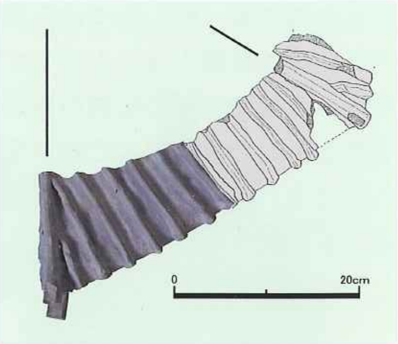


図7　明科廃寺出土の瓦塔

（5）明科廃寺の姿は

大量の瓦が発見された場合、屋根全体を葺くため最も出土量の多い瓦が、創建時に使われた瓦とされます。5次調査で発見された軒丸瓦は第2型式が多く（57%）、つづいて第1型式になります（39%）。第2型式が創建瓦となりますが、そうではありません。瓦だまりの下から発見された掘り込みの出土状況は、第1型式が古い可能性を示しています。金堂や講堂、塔、鐘楼などの瓦葺き建物が一度に整備されたのではないかもしれません。建物は、隅平瓦の存在から寄棟、入母屋、宝形造のいずれか、少なくともその一つに巨大な鵄尾がのっていました。瓦葺き建物の周囲には、僧侶の住まいなどの掘立柱建物が建っていたのでしょう。

素敵な瓦から、塔が聳え立つ壮大な伽藍の姿を想像するのも楽しいものです。

2　瓦はどこから、対岸の桜坂窯、そして新しい発見

（1）桜坂窯跡（図8）

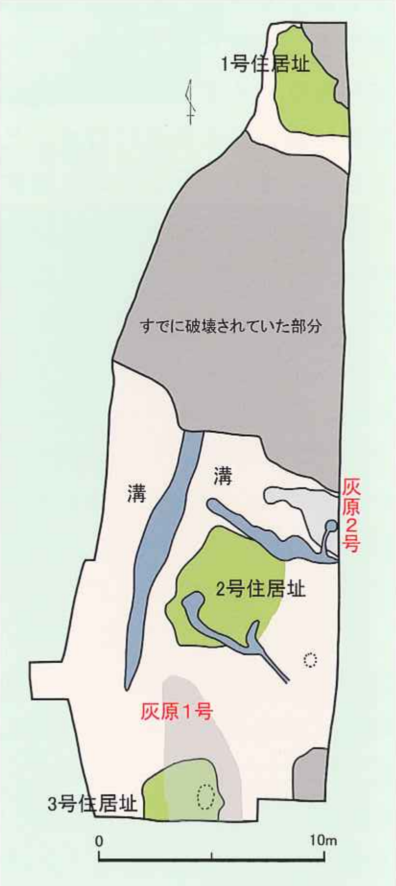


図8　桜坂窯跡

平成9年に、窯は発見できませんでしたが、不良品や薪材の炭がまとめて捨てられた2カ所の灰原と、竪穴住居跡3棟が調査されました。二カ所の灰原は、平瓦の調整方法が違うことから、最低2回の稼働が考えられます。製品は運び出され、焼成が悪かったり変形した不良品や破損品が出土しました。丸瓦・平瓦が圧倒的に多く瓦を中心に生産する窯と考えられますが、須恵器のさまざまな製品も焼かれます。

軒丸瓦は4点出土しています。灰原1号に隣接して、明科廃寺と共通の第2型式の素弁一二弁蓮華文軒丸瓦が出土しています（図9）。この窯が明科廃寺に瓦を供給したことを物語っています。灰原2号からは、文様が第一型式の素弁八葉蓮華文ですが、周縁部の文様や製作法が一本作りでない軒丸瓦が出土しています。四重弧紋の軒平瓦が6点出土していますが、削って段を作る有顎で、明科廃寺から現在のところ出土していません。丸瓦は、無段式で、内面には枠板の痕跡（模骨痕）が観察できる場合が多く細い板で作られた木型が用いられています。平瓦は模骨痕が残り、桶巻作りと考えられます。このほか、鵄尾の破片が出土しています。

図9　素弁十二弁蓮華文軒丸瓦

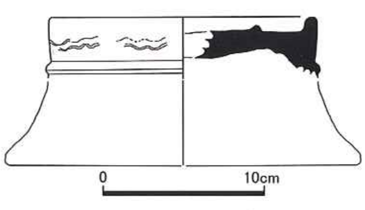


図10　圏足円面硯

食器は数多く出土しているます。時代決定の根拠とする杯Bと杯

Gの蓋が合計で186点が出土し、そのうちの156点（84%）が杯Gです。杯Hは確認できませんでした。このほか須恵器は、高坏や甕、長頸壺、短頸壺、横瓶などが出土しています。特殊なものとして、2号住居址から圏足円面硯の破片、1号住のカマド付近から瓦塔の初軸部が出土しています。

このように、桜坂窯跡は7世紀後半のそれも新しい段階に明科廃寺に瓦を供給し、圏足円面硯や瓦塔、新しい食器である須恵器杯Gを生産していました。今回の調査区から明科廃寺の瓦をすべて供給していたかは、今後検討する必要があります。

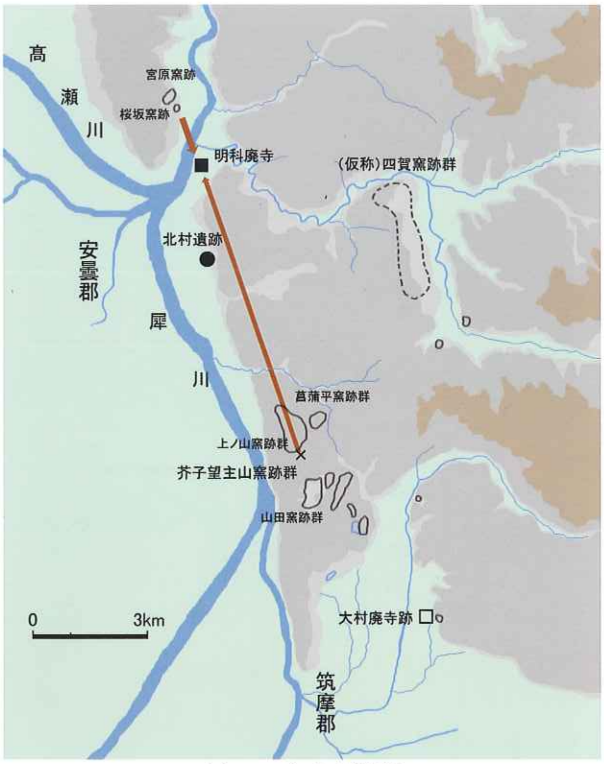


図11　東山窯跡群

（2）東山窯跡群（図11）

芥子望主山周辺の安曇野市から松本市にかけて多くの窯跡が存在します。8世紀にはいって須恵器の生産を始め、土器焼成坑による土師器生産に比重を移しながら9世紀後半まで続きます。その東麓、松本市岡田地区に瓦が出土した窯業生産に関連した集落が展開します。瓦は、窯跡や集落から合計240点ほど出土していますが、専業で焼成した窯の発見がなく、補修用の需要にあわせた生産と思われます。その供給地は、岡田地区から多くの瓦が出土するため、筑摩郡方面と考えられています。

図12　重圏唐草文軒平瓦

重圏唐草文瓦　明科廃寺の軒平瓦と同じ文様の、重弧文とかなり崩れた唐草文が組み合わさった軒平瓦が、2点発見されました。発見場所は、操業時期が8世紀中頃から後半の上ノ山窯跡群14・15地区と尾根を挟み反対側の松本市島内山田一本松地籍で、一連の窯跡と考えられます。創建から1世紀ほど経った頃に、補修瓦として明科廃寺に供給されたのでしょう。

3　寺を支えた村　そして新しい村

明科廃寺跡から北へ200m程離れた明科総合支所一帯の栄町遺跡は、調査面積が狭く遺跡の全体像を明らかにできません。明科廃寺の創建以前から大きな村があり、寺院建立に大きな役割を果たしたと考えられます。しかし、奈良時代まで続きません。村の有力者が、寺院完成後それほど経たないうちに力を失い姿を消してたのでしょうか。

上手屋敷遺跡で、掘立柱建物が発見されました。調査範囲外に広がるため、全体は不明ですが、かなり大きな建物になりそうです。また、長野自動車道にともなって調査された北村遺跡（図13）では、7世紀末から8世紀前半の館跡？が発見されました。周囲を塀と溝で囲った掘立柱建物の居宅があり、その外側に二棟の倉庫が建っています。さらに多量に土器が廃棄された祭祀を行った場所があり、隣接して馬を埋葬した墓も発見されています。明科廃寺が造られた時代にかなりの有力者の村が登場しました。

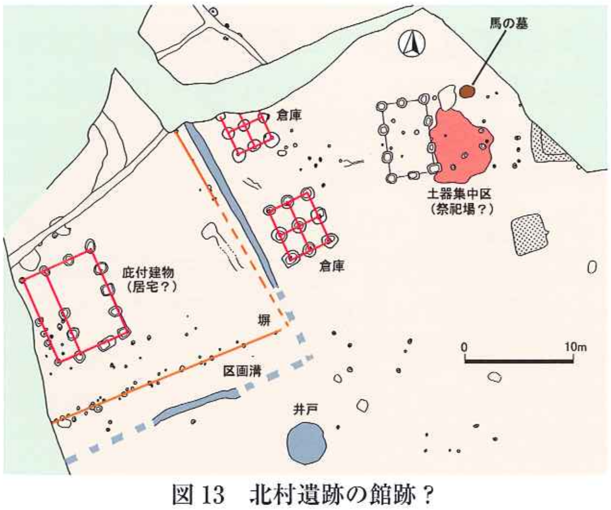


図13　北村遺跡の館跡？

図14　潮古墳群

図15　潮古墳群8号墳出土土器

4　そのとき古墳は

（1）潮古墳群（図14）

会田川を挟んだ北側に、盛土は失われていますが、現在のところ10基の古墳が確認されています。調査された3基はいずれも横穴式石室でした。道路工事に伴った調査された8号墳は、周りに掘られた溝の二カ所から、葬られた人々を供養のためか土器がまとまって出土しました（図15）。その中には杯G蓋や杯Bがみられます。少なくとも、8号墳は明科廃寺が造られた時代の豪族の墓です。第1次調査で発見された一辺20mの6号墳は古墳群の中で最大規模で、7世紀後半から8世紀の遺物が出土しました。潮古墳群は、まさに明科廃寺が造られた時代の、寺院の創建に関わった豪族の墓だったのでしょう。

（2）安曇郡の古墳

南北に長い安曇郡には古墳が数多く造られます。穂高古墳群は、掘金・三郷地区や松川村を含めると広い範囲に70基以上の古墳が造られました。横穴式石室の7世紀代を主体とした古墳です。木崎湖の南側から大町市内にかけての東山と、さらに仁科三湖をこえた白馬村南部にもまとまった数の古墳が造られます。それらと比べ明科地区の古墳は、決して多いとはいえませんが、数がそのまま豪族の力を表しているといえませんが、どのような理由で明科地区が寺院建立の場所として選ばれたのでしょう。

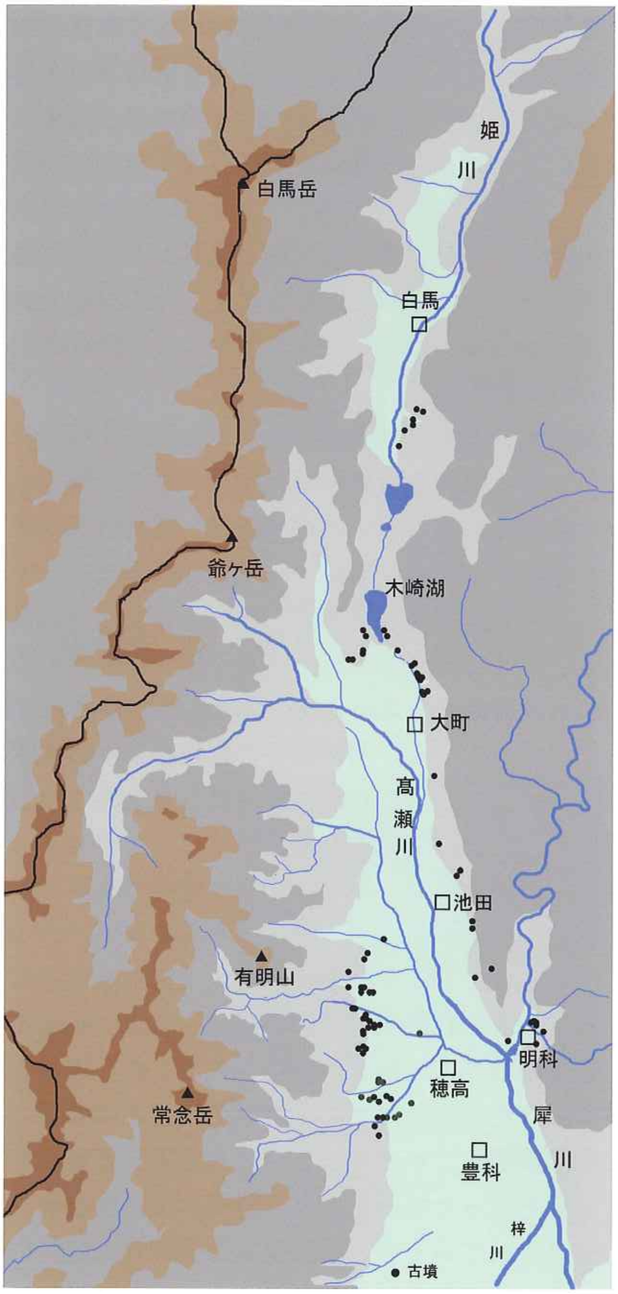


図16　安曇郡内の古墳分布（ドットは1基ではありません）
自治体史等を参考に作成

5　県内の発掘された古代寺院

瓦が多量に出土したり採集され、寺院跡と想定された遺跡は、13カ所にのぼります。国分寺跡（上田市）は、発掘調査によって寺院跡を確認できました。また、長野市元善町遺跡、千曲市雨宮廃寺跡、松本市大村遺跡は、明科廃寺のように瓦の廃棄場所が発見され、近くに瓦を載せた建物が想定できます。

寺院は、伊那郡で三箇所、埴科・更級郡では二箇所で、諏訪郡にはなく、行政単位の郡に一寺というわけではなさそうです。東山道に沿って立地しているようにも見えます。通過しない高井郡の左岸寺跡は、東山道に最も近く、明科廃寺も安曇郡の中では最も東山道に近い場所にあります。

しかし多くの瓦を葺いた寺院は、国分寺を含め10世紀までには衰退してしまいます。

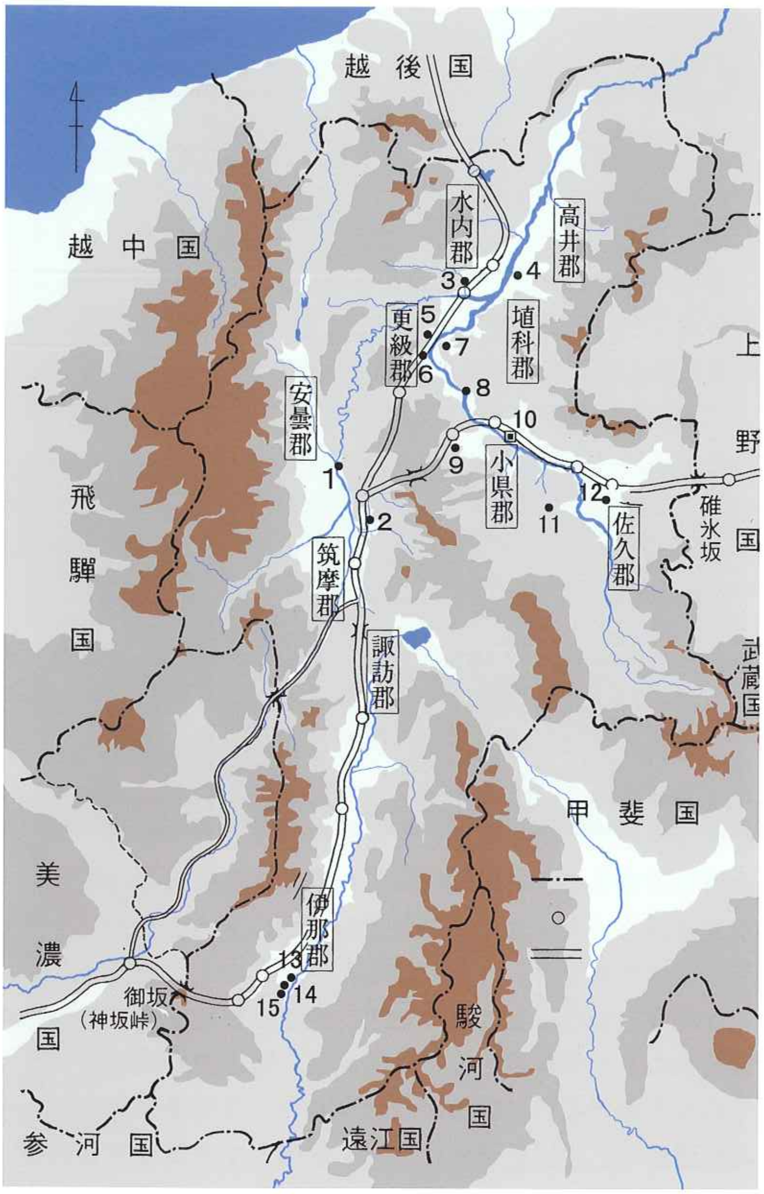


図17　信濃の古代寺院

1 明科廃寺　2 大村廃寺（松本市）　3 元善町遺跡（長野市）
4 左岸寺跡（須坂市）　5 上石川廃寺（長野市）　6 青木遺跡
7 雨宮廃寺（千曲市）　8 込山廃寺（坂城町）　9 吉田廃寺
10 信濃国分寺跡（上田市）　11 天神反遺跡　12 長上呂廃寺（佐久市）
13 毛賀御射山廃寺　14 前林廃寺　15 上川路廃寺（飯田市）
（原田和彦ほか 1997　倉沢 2012　をもとに作成）

おわりに

686年、壬申の乱で勝利した天武天皇は、律令制を導入し中央主権国家体制の確立を目指します。同年、「諸国毎家仏舎を作り仏像及び経を置かしむ」の詔をだし、仏教に国家の災いを鎮める思想的な役割を与え、全国に寺院造営を奨励します。信濃国も国家の大動脈である東山道に沿って、寺院が建立されました。華麗な伽藍、瓦葺きの建物、そこに置かれた荘厳な仏教や仏具は、人々を驚かせたにちがいありません。まさに新しい時代の象徴でもありました。明科廃寺も、何年もかけていくつもの建物で構成する伽藍が造られました。その姿は、明科地域、安曇郡の人々に、国の威光を目のあたりにするとともに、造営した豪族の権勢をも誇示しました。しかし寺の造営と経営は莫大の費用のほか、新しい建築技術、さらに寺院を運営するソフトが必要になります。豪族は、詔を契機に、あるいはそれ以前から都と結びつきを持っていたのでしょうか。

明科廃寺に瓦を供給した桜坂窯は、瓦造りの技術がないため、中央から派遣あるいは招請した工人たちが生産を主導したのでしょう。生産された硯（圏足円面硯）は、新しい文書主義の行政を進める象徴です。684年、朝廷から派遣された三野王は信濃国の図を作成し提出しています。信濃国の範囲が定まり、安曇郡を含め編成の基本となった郡（評）も行政単位として機能を始めていたのです。須恵器の食器は従来の杯Ｈではなく、杯Ｇを多量に生産します。都の須恵器による新たな食器様式を地方へ運び込む役割を果たしたのです。

コラム②　瓦が語る、歴史を語る？

1982年刊行の『明科町史』で三好博喜は、明科廃寺の軒丸瓦の素弁八葉蓮華文（第１型式２類）を寿楽寺廃寺と同笵で製作技法を含めて共通することから、南滋賀廃寺→寿楽寺廃寺→明科廃寺という工人の移動を想定しました。その後、山梨県天狗沢瓦窯跡からも明科廃寺と共通する文様の瓦が出土し、櫛原功一は近江の文様が、飛騨・信濃国と東山道を通って天狗沢窯跡にもたらされたという見解を示した。その後も軒丸瓦第一型式の分析から、工人の移動を含めその歴史的背景についていくつかの仮説が出されています。文様や製作技法などを突き詰めてゆけば、いろいろなストーリーが描かれるかもしれません。

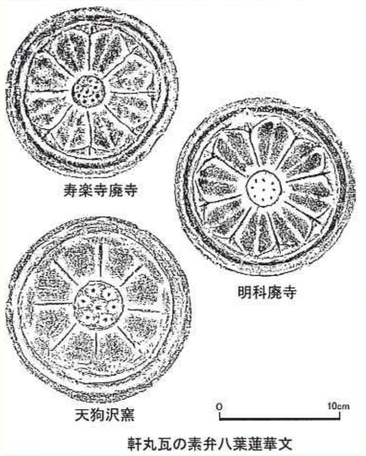


図 18　軒丸瓦の素弁八葉蓮華文
（報告書より引用）

豪族たちは、このような大きな変革にも関わらず、古墳に執着します。それは寺院が造られた明科域ばかりではなく、西山地区の穂高古墳群も同じです。食器も、焼き物や形は真似しましたが、厳密な規格性、用途に応じた多くの器種など、律令官人に食料を供給を目的にした都の土器様式の本質は持ち込みません。豪族たちは国の進める変革のすべてを受け入れたのではなさそうです。

寺院建立からそれほど経たず、創建に重要な役割を果たした栄町遺跡の村は消滅し、豪族の墓域であった潮古墳群に古墳が造営されなくなります。北村遺跡や上手屋敷遺跡に、馬を象徴とするような新たな有力者の村が登場します。明科廃寺の造られた時代は、明科地域、安曇野市域も、旧勢力の没落と新たな勢力の登場する変動の時代でした。その中で、明科廃寺は補修用瓦の供給を東山窯から供給を受けるように、法灯は守られ続けました。

しかし、片付けられた瓦の中の９世紀後半の土器は、創建から200年後に明科廃寺がなくなり、瓦寺院の時代にピリオドが打たれたことを示しています。10世紀、大規模な村が潮古墳群があった場所に形成され、会田川の挟んで南に古殿屋敷遺跡に有力者の墓が造られます。新しい時代が到来したのです。

明科廃寺は、発見されてから70年が経とうとしています。ここまでみてきたように天武天皇の時代にできあがった本格的な寺院でありそうだということはわかってきました。しかし具体的にどのような寺院であったか、ほとんどわかりません。時間がかかると思いますが、これからどのように明らかになっていくか楽しみです。　（原　明芳）

[主な参考文献]
上原真人　2015　『瓦・木器・寺院』　すいれん舎
尾野善裕　2000　「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅――猿投窯・湖西窯編年の再構築――』東海土器研究会
櫛原功一　1990　「瓦」『天狗沢瓦窯跡　発掘調査報告書』敷島町教育委員会
倉沢正幸　2012　「出土軒瓦から考察した信濃の古代寺院」『信濃』64－10
城ヶ谷和広　2003　「猿投窯岩崎17号窯出土須恵器の検討」愛知県史研究第７号
西弘海　1986　『土器様式の成立とその背景』　真陽社
原田和彦・宮川明美・飯島哲也　1997　「科野の飛鳥・白鳳期寺院」『古代寺院の出現とその背景』第42回　埋蔵文化財研究会
三好博喜　1984　「明科の古代寺院」『明科町史』上巻　明科町史刊行会
山路直充　2013　「山国の寺――情報伝達からみた山国の交通――」『古代山国の交通と社会』八木書店
山田真一　2002　「筑摩東山窯跡群における瓦生産」『田辺昭三先生古希記念論文集』　真陽社
[報告書等]
原嘉藤　1955　「長野県東筑摩郡明科町明科廃寺址」『信濃』７－７
明科町教育委員会　1998　『桜坂古窯址』
明科町教育委員会　2000　『明科廃寺址―個人住宅建替えに伴う緊急発掘調査報告書―』
明科町教育委員会　2005　『潮神明宮前遺跡Ⅱ』
安曇野市教育委員会 2017『明科遺跡群明科廃寺４』

「ふるさと安曇野　きのう　きょう　あしたNo.19」
編　集　安曇野市豊科郷土博物館
発行日　令和元年７月６日
安曇野市豊科郷土博物館
〒399-8205長野県安曇野市豊科4289-8
TEL：0263-72-5672　/　FAX：0263-72-7772
URL：http://azuminohaku.jp/